
ラブレター

天野 珊瑚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブレター

【Nコード】

N 8 6 1 6 H

【作者名】

天野 珊瑚

【あらすじ】

《アクセス数410突破！！》引越しの準備をしている時、高校の卒業アルバムに挟んでいた黄色い手紙を見つける希美25歳。そして、高校時代の甘くて切ない恋を思い出していく青春ロマンス。卒業まであと3ヶ月。バレンタインに人生初の告白を決意！1年もの間あたたためてきた想いは届くのか…。

第1話 古びた手紙（前書き）

25歳の希美。

第1話 古びた手紙

「希美ー！荷物これで終わりー？」

「まだー！もうちょっと待ってー」

「早くしなさいよー！」

お母さんの威勢のいい声が家の中で響く。

わたしの部屋中には山のように積み上げた段ボール。

ガムテープやゴミ袋が床に散乱している。

窓を全開にしても、もうもうとほこりが舞っていて、マスクを付けているのに喉が痛い。

目もしょぼしょぼしてる。

今日は引越し。

前もって片付けたつもりだったのに、引越し当日になって最後の荷物を詰めるのに追われている。

「あーもうっ！荷物多いっ！」

25年間溜め込んだ洋服や本、ちっちゃなガラクタ。

自分でも嫌になっちゃう。

お母さんが、いらないものは思い切って捨てなさいって言うんだけど、ホント、捨てればよかった…

えっと…化粧品はポーチに入れて、割れないようにクッションになるものは…っと…

キョロキョロ…

ぐちゃぐちゃになった机の周りを見回して、手ごろなタオルを見つ

ける。

あ。

あのタオルで巻きちゃお！

ちよつと横着だけど、いいやつ

よいしょつと

かがめていた体を起こして、机のほうへ手を伸ばす。

「もうちよつと…」

段ボールの隙間を潜り抜けた手がなかなか届かない。

「ンーツ…」

体をひねって、限界まで手を伸ばした瞬間。

バサバサバサツ

ものすごい音を立てて、段ボールの横に積み上げていた本や雑誌が雪崩のように崩れ落ちた。

「あああ… やつちやつた…」

わたしは一気に脱力。

無理して手を伸ばしたせいで、肩が段ボールに当たってしまったらしい。

仕方なく立ち上がって、本を片付けに行く。

「はあああつ」

ため息を吐きながら、空の段ボールを手繰り寄せて詰めていく。
もう疲れたあー

誰か全部やってくれないかなあ

腰痛くなっちゃった

窓からそよそよと風が吹いて。わたしの髪を揺らす。
外は快晴。
絶好の引越し日和。

天気いいなあ。

早く終わらせてゆつくりしたい

そんなことを考えながら、手に取った本にA4サイズの本が混じっていることに気が付いて、
手を止める。

藍色のしつかりとした硬い表紙がはみ出ている。
わたしは本の束からその1冊を抜き取った。

「わあ…懐かしい」

それは藍色の表紙の中、誇り高く金色で高校の名前が書かれている卒業アルバムだった。

笑みを浮かべながら、分厚いページをパラパラとめくっていく。

アルバムには、集合写真から個人写真、遠足や修学旅行、体育大会、文化祭などの思い出がくつきりと刻まれていて

「みんな若いなあ」

ページをめくる度、鮮明に高校時代を思い出していく。

そして、自分のクラスに差し掛かった時に、次は黄色い封筒が見え隠れしていた。

「…？何だろ？」

ページをめくって、手紙を手取る。

手紙はアルバムにはさまっていたとはいえ、7年の月日経っていたためうつすらとだが黄色く変色していた。

ひっくり返して、表書きを見るとそこには『柴田君へ』と幼い字で書かれていた。

これ…この手紙…もしかして…

わたしは、手紙を持ったまま１７才だった頃の自分を思い出していた。

第2話 休憩時間（前書き）

17才、高校3年生2月初旬の思い出。

第2話 休憩時間

8年前。

わたしが17才のとき…

キンコンカンコン…

チャイムが校舎に鳴り響く。

やっとお昼休憩。

ざわざわとおしゃべが始まって、みんなが移動しだす。

わたしもいそいそとカバンからお弁当箱を取り出す。

苺のハンカチに包んだ小さなお弁当を持って、仲良しの麗ちゃんと加奈のところへ移動。

わたしの名前は木下希美。

高校3年生。

背が低くて、147cmしかないちびっこ。

童顔で、いつも美容師さんにボブが似合うって言われるから小さい頃からずっとボブのまま。

特に取り柄もなく、内気なわたし。

「麗ちゃんっ、今日はお弁当？」

「うん。受験前なんだからスタミナつけろってウナギ入れてくれて」

「えーウナギ？そんなお弁当食べたことないよー」

「でしょ？うちの親はやる事が単純なんだから」

呆れた顔をしつつ、ちょっと恥ずかしそうにお弁当のフタを開ける
開ける麗ちゃん。

照れくさいのかな。
でも嬉しそう。

「あははっ。でも麗ちゃんは国公立受けるからこれから本番だもん。力つけないきゃね」
「そうだね、ありがと」

わたしの友達の麗ちゃん、北林麗華。

才色兼備って言葉がこれほどまでに当てはまる子いないんじゃないかって思うくらい綺麗な子。

シャープな顔つき。

透き通った肌。

目はおっきいし、マスカラをつけなくてもまつ毛は長くてふさふさしてる。

背も高くて、165cmはある。

それに付け加えて、成績優秀。

特に英語が得意で、既に推薦で外国語大学に受かっている。

でも私学は学費がかかるからって、国公立も受けるんだって。ほんとに親孝行。

尊敬しちゃう。

わたしなんて安全圏の私学を受験して、結果を待つばかり。
もう受験勉強はしてない。

「あれ？そういえばカナちゃんは？」

ウインナーを食べながら、教室をぐるっと見回す。

「ああ、カナね。ベルが鳴った瞬間飛び出して行ったよ」
「食堂かな？」

「また高カロリーなパン買いに行ってるんじゃない？」

「…ダイエツトは？」

「んーやめたのか、忘れてるのかどっちか」

お箸をくるくる顔の前で動かす麗ちゃん。

「ぷっ」

「あははっ」

2人で目を見合わせて笑い出す。

「カナは懲りないねー」

「もう何度目だろー」

「あんなに絶対やせるんだって言ってたのに…」

「カナちゃん、甘いものに目がないから…」

2人で噂をしてたら、

「麗ちゃんーん！希美ーん！」

カナちゃんが、顔を真っ赤にして帰ってきた。

「カナ…」

「うわっ、いっぱい！カナちゃん…」

一体いくつあるのってびっくりするくらいのパンの量を両手に抱えてる。

「お待たせーっ！」

机にバラバラとパンを広げる。

うひゃあああ！

1…2…3…4…5…

えっ！

5個っ？

「今日はねっ、新商品が入ったっておばちゃんに勧められちゃって
…クリームパンははずせないしっ、このチョコパンも諦めれなくっ
て」

パンを片手に興奮気味で話すカナちゃん。

麗ちゃんがため息ついてる。

わたしの不安をよそにカナちゃんは満面の笑みで

「おいしそうでしょー!」

って、ペリペリ。

袋を開けだした。

「カナーこんなに食べる気?」

わたしと麗ちゃんは、見てるだけでお腹いっぱい。

「んー余ったらバイトの前に食べるから大丈夫」

もうすっかりダイエット宣言を忘れてるらしい。

わたしのもう一人の友達、カナちゃん。

栗原香夏子 156cm。

くるくるパーマに茶髪。

メイクもバッチリしていて、雑誌から飛び出してきたようなオシヤ
レさん。

甘いものとか可愛いものに目がない。

推薦で短大の服飾科への進学を決めている。

「ああ、こわいつ。また彼氏に太ったって言われるよ」

麗ちゃんの痛恨の一言。

それにはグサツときたのか、ほっぺをぷくつと膨らませる。

「カナが甘いものの好きなのは知ってるし、わたしはカナが太ってる
と思わないからいいよ」

淡々と麗ちゃんのお説教が始まる。

「でもね、彼氏に太ったって言われる度、毎回電話して来られるわたしの身になってよ…はぁぁ」

麗ちゃんのため息に、カナちゃんのぽつぺたが、ぷうううってます膨れる。

「あつ、でもカナちゃんはバイトもしてるし、夕方にお腹すいちゃうんだよね。運動量も多いだろうし…」

慌ててわたしがフォローすると

「んーっ！希美っ！大好きー！」

両手を広げてカナちゃんが抱きついてくる。

「希美は甘いんだから…」

がつくりした様子で、食べ終わったお弁当を片付けだす麗ちゃん。

そんな麗ちゃんをよそに、

「希美っ、校庭に柴田がいるよっ」

「えっ」

条件反射。

くるっと窓から覗き込む。

今はまだ2月。

外はビュービュー木枯らしが吹いている。

校庭に植えている桜の木々は裸になっていて、余計寒さを誘う。ただ花壇にサザンカが咲いているだけ。

寒さゆえ、休憩時間になっても外に出て行く子は少ない。

「寒いのにバカだねー柴田は」
カナちゃんは呆れた様子。

「ほんと…風邪ひいたらどうするんだろ…」

そんなことを呟きながら、わたしはカラカラと窓を開ける。
ヒューっとひんやりした風が髪をなびかせる。

柴田君だあ…

ドキドキしながら、窓にそっと手を載せて、食い入るように見つめる。

校庭の端からゴールに向かって走りまくって、ボールを取り合いながら、クラスメイトとサッカーをしている。

ドキン…ドキン…

胸が高鳴る。

第3話 好きになっただきっかけ（前書き）

17才、高校3年生春。

第3話 好きになつたきつかけ

桜が散り始め、はらはらと道がピンク色に染まっていた今年の春。先生との進路相談の話が長引いて、帰りが遅くなった日のこと。

夕日が沈み、空がグレーに染まっている。

うつすらと雲が流れていているのが見えて、街灯がピカピカ光り始めた。

遅くなっちゃった。

早く帰らなきゃ。

わたしは足早に校舎を出て、校庭に出る。

部活も終わってみんな帰ってしまったのか、校庭は静まり返っていた。

もうみんな帰っちゃったんだ…

昼間の賑やかさが幻のようで、一人取り残されたような気分。教科書が入ったカバンが急にずしと重くなる。

先生と話した進路相談が頭を駆け巡る。

——「木下は文学部志望かー」

担任の森先生。

国語を担当で、まだ30才。

気さくで朗らか、文系のわりに体格はがっちり。

ちよつと伸ばした無精ひげが「男らしい、渋い」ってカナちゃんがいつも騒いでる。

「色々悩んだんですけど、本が好きなので文学部がいいかなって思

って……」

先生が持つ進路希望の用紙を見ながら話す。

「そうだなあー文学部だと就職の時に苦労するかもしれないぞ。教員免許とか司書の資格をとっても募集はほとんどないらしいからなあ……」

難しそうな表情を浮かべる先生。

「将来、就きたい仕事は何かあるのか？」

「……まだ……漠然としか……」

言葉を濁すわたし。

そんなわたしを見て、先生は深い息を吐く。

「俺も文学部出身で、就職に苦労したクチだから心配でな……まあまあ、人生何とでもなるさって笑えないかつ。ハハハっ」

「もー先生っ」

こういうときに説教じみた事を言わない先生。

こういうところが人気の秘訣。

「ハハハッ、じゃあ文学部が決まったところで、次は大学選びだなっ」

それからどの大学を受験するか1時間ほど話し合った。

結局、安全圏の私学の大学に絞って受験することになった――

「将来何になりたいか……かあ」

暗くなつていく空を眺めながらため息が出る。

高校に入学した時は、みんな一緒だった。

将来とか大学とか何も考えないで、毎日おしゃべりして、遊んで。

でも、気づいたらわたしは取り残されていた。

2年生の秋から進路説明会が始まって、近くの進学校に通う同級生は塾三昧だよって笑っていて。

麗ちゃんは将来役に立つからと外大への進学。

カナちゃんは自分が好きなブランドのメーカーに就職したいって決めていた。

わたしは、昔から読書が好きで国語の成績だけが人より良いだけで、文学部を選んだ。

それだけの理由。

先生もきつとわかってる。

将来なりたいものとか

目指したいものとか

情熱とか

全然ないんだって…

みんなと一緒に思っていたのはわたしだけで、みんなはわたしより前を歩いてる。

「へこむ…」

とぼとぼと校門に向かって歩き出す。

ぼんっ ぼんっ

誰もいないと思っていた校庭からボールの音がする。

あれ？

もう誰もいないと思ってたのに…暗くてわからなかった。

くるつと音の鳴るほうへ顔を向く。

そこにいた一人の男の子。

もう真つ暗になってきたのに、一人でボールを蹴っている。

居残り？

自主練？

首をかしげながら、じつと見つめる。

誰も見ていないのに真剣な顔で、懸命にボールを転がして、汗を流している。

額から全身に汗をかいているのが微かに見て取れた。

それはまるで、ベタなドラマのワンシーンのようで、わたしは釘付けになった。

口がポカンつと開いて、心臓がバクバク動く。

ドキドキドキ…

すごい…

短く切ったツンツン頭。

目元がぐつと上に上がっていて、険しい表情。

砂をかぶったユニフォーム。

ザッザッザッ

スパイクとボールが砂を削って舞っている。

時間が止まったような気がして、ぼうつと立ちすくんでいたら

「アッ！」

大きな声が聞こえて

ポーンとボールが宙高く跳ねた。

「えっ！？」

ハッと正気に返ると

ポンポン…

目の前にボールが転がっていた。

えっえっえっ？

動揺する。

わたしがいることに気づいた彼は

「ごめーん！ミスった！こっちに投げてー！」

両手を口に添えて、大声で叫んだ。

焦ってカバンを持っていた手を離して、コロコロと転がったボールを拾う。

「な…投げたらいいのー？」

「うんっ！なーげーてー！」

わたしに聞こえるように抑揚をつけてもう一度叫んだ彼。

促されるように力いっぱい両手で投げる。

力ないわたしが投げた球は、彼の元まで届かず、手前に落ちてしまった。

「あっ…ごめんっ」

「あははっ」

嬉しそうにボールの元に駆け寄って行く。

「あーりーがーとー！」

満面の笑みで両手を振る。

ドクンっ…

その笑顔があまりに無邪気で胸が深く音を立てた。

さっきまであんなに真剣な顔しかしてなかったのに…

ドキン…ドキン…

ギャップの激しさが胸を打つ。

「はーやーくーかーえーれーよーっ!」

そう言って、バイバイって手を振って、彼はまたボールを蹴りだした。

夕日に照らされて、2人の影が長く伸びている。

これが、わたしと彼との出会い。

恋の始まりだった。

第4話 決心

あの日から学校に来る度、いつも柴田君を探してる。
わたしの日課になった。

今日も柴田君元気そう。

よかった…

窓でじつと白い息を吐きながら、柴田君を見つめる。

一人で物思いにふけていたら

「希美…熱心なのはいいんだけど…寒い」

麗ちゃんが、参考書を片手に震えていた。

「あつ、ごめんっ」

急いでカラカラ窓を閉める。

「ごめんね。麗ちゃん」

大事な試験前なのにわたしってば。
しゅんつと椅子に座る。

「いいじゃん、いいじゃん。わたしと希美はもう卒業待っただけなんだしっ！高校生活楽しまなきゃ」

3つ目のパンを食べながらカナちゃんが笑いかける。

「カナは楽観的なんだから。希美は結果発表いつなの？」

「えっと…来週」

「そっか。早く合格通知届くといいね」

「うん」

こくんつとうなずく。

麗ちゃんはいつも気遣ってくれて優しい。

「ねっねっ！そういえば希美はバレンタインチョコ、どうするの？
柴田にあげるの？」

カナちゃんがぐいっとな身を乗り出す。

「チョコ…チョコ？」

「うんうん、チョコ」

「渡したいけど、それって告白するってことだよな？」

「当たり前でしょー？チョコだけ渡してどうすんの」

「う…うん…」

カナちゃんの勢いにたじろぐ。

「卒業式まであと一ヶ月！最後のチャンスだって言ってる告白しよう
としてる子多いんだよ」

「あーもう。カナっ！希美が困ってるでしょ」

割ってはいる麗ちゃん。

「だってー希美見てるとき、このまま卒業しちゃうんじゃないかっ
て思ってる…」

「……」

わたしは黙り込んで何も言えない。

そうだよな…

卒業まであと一ヶ月。

女子大に行くわたしは、もう柴田君と会うことはない…

わかってるけど…

柴田君はきつとわたしのことを知らない。

話したことがあるのは、あの校庭でボールを投げた時だけ。
いつも見てるだけで、何もしてこなかった。

廊下ですれ違っても恥ずかしくて顔を隠しちゃう。

「もし、チョコ買いに行くんだったら早めに行かないと可愛いハートのチョコとか売り切れちゃうよ？わたしも彼氏の買いに行くし…」
両手の人差し指を合わせるカナちゃん。

「カナ…単に付いてきて欲しいだけでしょ…」
呆れ顔の麗ちゃん。

「だからっ、そんなんじゃないかって、わたしは希美のためを思っ
！って麗ちゃん聞いている？」

「聞いているわよ。耳にタコが出来るくらいねっ」

わかってる…

バレンタインが…告白するチャンスなんだって…

窓の外をもう一度眺めて、柴田君を探す。

楽しそうにボールと遊んで、笑い声がここまで聞こえてきそうなくらい笑ってる。

うん…

カナちゃんの言うとおり。

わたしは柴田君が好き。

ドキン…ドキン…

胸いっぱいでもう溢れそうなんだもん。

付き合うとか考えたことないけど、何も言わずに卒業したら後悔する…

「カナちゃん…」

小さな声で話しかける。

「あーもー希美。カナが言ったことは気にしないの。ねっ」
背中をさすさす撫でてくれる麗ちゃん。

「わたし…」

「うん？」

2人がわたしをじっと見る。

「柴田君に告白する…」

わたしの言葉に。

「うそっ！ホントに？希美ー！よく決心したー！」
ぴょんぴょんと飛び跳ねて喜ぶカナちゃん。

「本気なの？大丈夫？カナに合わせることはないんだよ？」
お母さんみたいに心配する麗ちゃん。

でも…わたし…

「麗ちゃん。告白したいの。大丈夫だよ」

はつきりと告白宣言をした。

第5話 チョコ選び

告白宣言から数日後。

カナちゃんと待ち合わせをして、チョコを選びに行く日。

お母さんにはまだ合格したわけじゃないのにつて顔をしかめられたけど、ムリヤリ家を出て来た。

お気に入りの水玉のニットワンピース。

真っ白なフェイクファーのボレロ。

編み上げのブーツを履いてお出掛け。

可愛い洋服を着るだけで、わくわくする。

街はバレンタイン一色。

どのショーウィンドウを見ても、所狭しと赤とピンクのハートが散らばっている。

風船や花でつくったハート。

キラキラ、イルミネーションになっているハート。

どれもすごく綺麗！

カナちゃんを待っている間、わたしはキョロキョロしぱなっしだった。

「希美ー！ごめんねっ！お待たせ！」

息を切らしてはあはあ言ってる。

「全然待ってないよ。可愛い風船とか見てたら楽しくって」

「よかったあーこれが麗ちゃんだったら怒られるところだよー」

「あははっ」

「どこ見に行く？」

「カナちゃんに任せる」

「じゃあ、この下にいっぱいチョコ売ってるから見に行こっ」

「うんっ」

わたしたちが向かったのはデパ地下。

高級感がある店内に、整然とたくさんのお店が立ち並んでいる。

バレンタインまで1週間を切った店内は人でごったがえしていた。

「うわぁ…思った以上に混んでるね…」

「うん…」

2人とも店内の雰囲気圧倒される。

バレンタイン商戦ってテレビでしかみたことないけど、すごい熱気。

「一周ぐるつとまわって、それぞれ気に入ったチョコがある店に走って、ここで待ち合わせにしようか」

「うん。わかった」

でも…人だかりが凄くてなかなかチョコを見れない。

歩いている途中に販売員のお姉さんに生チョコを勧められる。

「おいしいでしょー？生チョコは甘さは控えめで甘いものが苦手な彼でも食べやすいですよ」

販売員さんに渡されたチョコをカナちゃんがパクツと食べる。

「あっ、ほんとだ。甘くない」

カナちゃんの反応に

「そうでしょー？ラム酒を使っているので上品な味で、今年のパッケージは可愛いハート型なんです」

ニコニコと微笑む。

「じゃあ、これ下さい」

えっ！

カナちゃんったら！

即決！？

「ありがとうございますっ」

嬉しそうな販売員さん。

まだ半分もまわってないのに…

「希美！お金払ってくるから他のところ見て来てー」

「う…うん」

「さっきのところで待ち合わせね」

そういい残して、人ごみを掻き分けて行ってしまう。

えー！

カナちゃんっ！

ぽつんと置いてきぼりになったわたし…

どうしよう…

こんな人ごみの中選べるかな…

不安になりながらも、トコトコとチヨコを見てまわる。

ど…どれがいいんだろ…

わたしスーパ―でしかバレンタインチョコ買ったことない…

販売員さんに近づくと断りきれなさそうでなかなか近寄れない。

カナちゃあん…

涙目でキョロキョロしているとガラスのケースの端に置いてるまあ

るい箱に目がついた。

ボール…？

恐る恐る近づいて中身を見る。

真っ赤な球状の箱が、真ん中で割れていて、チョコが5個入っていた。

可愛い…

わたしは部活の後、一人で練習している柴田君の姿を思い出していた。

暗くなっても一人でボールを蹴っていたあの春の日。
真っ赤な情熱と大好きなボールと同じ形…

「あ…あのっ！これ下さいっ」

柴田君を好きになったあの時の映像が鮮明に流れて、気づいたらわたしはちこのチョコを買っていた。

しばらくしたのち…

待ち合わせ場所でカナちゃん会った。

「よかったぁー甘くないチョコ買えて。彼氏、甘いのが苦手なんだー」
満足した面持ちで帰りの電車に乗る。

「わたしも可愛いチョコ買えてよかった」
ぎゅっと紙袋を握り締める。

嬉しい…

柴田君、喜んでくれるかな…

「でもさー希美が柴田に告白するって言ったときはビックリしたよ

「」

「えー？」

「だって、今まで柴田に話しかけたりすら出来なかったでしょ？」

「うん…」

「麗ちゃんが心配してた気持ちわかるもん」

「うん…」

カナちゃんがわたしの顔を覗き込む。

「でもどうして告白、決心したの？わたしが最後だって言っただから？」

不思議そうな顔をする。

「んー」

「なによー教えてよ」

ひじでとんとんと突くカナちゃん。

わたしはぐつと足を伸ばして

「進路の話した帰りにね、わたし、すっごくへこんで…」

「どうして？」

「カナちゃんも麗ちゃんもちやんと将来考えてて…でもわたしは、どうして大学に行くのかわかって…」

「そうだったんだ」

「でもね、帰りに一生懸命サッカーしてる柴田君を見て、

うまく言えないけど、元気もらった。だから好きになって、今度はわたしが柴田君がづらい時とか疲れたときにそばにいたいって思ったの」

「そっかぁ」

「でもカナちゃんの後押しがなかったら、チョコすら買いに行けなかったかも」

「あははっ」

「カナちゃん、ありがとう」

「うん…がんばって言えるといいね」

「うん…」

小さく頷いて、ピンク色のリボンでくくられたまあるい箱を見つける。

チヨコ…渡せるかな…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8616h/>

ラブレター

2010年10月28日01時24分発行